

【巻頭言】

センターの‘Next Ten’の課題

心理相談センター長 兒 玉 憲 一

「比治山大学大学院心理相談センター紀要第10号」をお届けします。

本紀要は、比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター（以下、センター）の規程に基づき、心理臨床に関する理論的実践的研究や大学院生等の研修の成果を発表することを主たる目的とし、平成17年度に年報として出発しましたが、センター設立11年目に入ったのを機に、年報を紀要に改称しました。

特集として、センター主催の平成25年度（第8回）対人関係セミナーの講演記録を掲載しました。講師は、京都文教大学学長（当時）の鐘幹八郎先生です。わが国のE.H.エリクソン研究の第一人者である先生に、エリクソンの生涯、固体分化発達8段階の図式、「幼児期と社会」のサム症例、「洞察と責任」の青年牧師の症例などの紹介を通して、自我心理学者エリクソンが実は隠れ対人関係論者であったという大胆かつ興味深い論を展開されています。スライドを多用された長時間のご講演を限られた紙数に編集したため、わかりにくくなった部分もありますが、貴重な講演の記録と思われまふ。ぜひご一読ください。

ちなみに、塩山二郎前センター長の企画で通算8回開催された「対人関係セミナー」は平成25年度で終了し、平成26年度からは「心理相談セミナー」と改称して再度出発しました。センター長だけでなく、センターを支える臨床系教員がその専門分野を生かして自由に企画することにしました。新生セミナーの報告は本紀要の第11号から開始しますので、ご期待ください。

研究論文は、本研究科の関係教員から2編、修士生及び現役の院生から5編投稿があり、編集委員会の審議の結果受理された5編が掲載されました。ちなみに、本年度より発足した編集委員会の委員は、一円禎紀准教授、谷淵真也講師、佐々木美保講師、委員長は私が務めました。

授業や学生指導で多忙をきわめるなかで投稿いただいた教員の方には、感謝と敬意の意を表します。どんな状況のなかでも、研究を重ね、論文を発表し続けることが心理学者の責務であり矜持であると思ひます。

修士生の2論文は、いずれも平成25年度に本研究科に提出した修士論文を本紀要の研究論文としてまとめ直したものです。2年間かけて書いた修士論文を研究論文として公表する場を提供することは、本紀要の重要な役割と考えます。その意味では、投稿しなかった者や修正原稿が期限に間に合わなかった者がいたのは、残念なことです。一方、現役の院生から研究論文の投稿があったことは快挙といえます。今後も、現役の院生からの研究論文の投稿が続くことを期待します。

平成25年度のセンター活動実績報告書は、センター相談員で事務を担当している江村佐和子先生に執筆してもらいました。その際、センター運営委員会でも検討されたように、センター活動、とくに相談活動の課題にも言及してもらいました。臨床心理士養成大学院の実習施設としては、成人の精神科患者の来談が多く、子どもや保護者の来談が少ない。そのため、院生の研修相談員が担当できるケースがきわめて少ない。これでは、センターの重要な役割の1つを十分果たすことができない。そこで、平成26年度からは、成人の精神科患者は臨床系教員が受理面接を行い、担当予定の研修相談員を記録係として陪席させるように改めました。また、親面接は臨床系教員、プレイセラピーは研修相談員が担当できる親子並行面接のケースを増やすため、様々な広報活動を開始しました。

本紀要やセミナーの名称変更、センターの相談体制の改善などは、その都度センター運営委員会に諮り、研究科長や事務局長をはじめとする構成員の方々の協力を得て慎重に進めていますが、センターの抱えている課題は多岐にわたります。加えて、平成27年早々に開かれる通常国会で、公認心理師法案が成立する見込みです。国家資格となると、学部及び大学院のカリキュラムも大幅に見直す必要があり、それを受けてセンターの果たす役割も大きく変わることが予想されます。本号がお手元に届く頃は、わが国の心理学の学部や大学院は大きく揺れ始めており、産みの苦しみが当分続くことを覚悟する必要があります。